

首相の決断（投稿原稿）

日米同盟は今深刻な危機に立たされている。鳩山首相の優柔不断とブレによって日米関係に深い亀裂が入りはじめた。信頼の失墜は一瞬だが回復には大変な労力と時間がかかる。

そもそも米軍再編の原点は「抑止力強化」と沖縄の「負担軽減」ではなかったか。その原点が忘れられ「負担軽減」だけが取りざたされている。

米軍のプレゼンスにより日本の安全を確保し、アジアの平和と安定を維持するのは我が国の安全保障政策の基本である。鳩山首相も就任以来、日米同盟が基軸であると繰り返してきた。もとより沖縄県民の負担軽減、なかんずく普天間の移転は喫緊の課題である。だからこそ慎重に時間をかけて検討し、地元の意見も聞きながら日米の英知を結集してきた。「抑止力強化」と「負担軽減」の両者のバランスを熟慮し、ぎりぎり及第点を確保したのが日米合意案だったはずだ。だが「抑止力強化」と「負担軽減」という両輪の片方がいつのまにか抜け落ち、一輪車となって迷走をはじめている。

「結論先送り」はワインとは違う。時間が経っても決して美味しくはならない。時間が経てばたつほど、「県外移転」というリアリズムに欠けた選択に幻想に似た期待を抱かせるだけである。

戦後、全面講和か単独講和かで世論を二分した時がある。当時の首相吉田茂は反対を押し切って単独講和を選択した。全面講和は理想的だがリアリズムに欠けていた。この選択が正しかったことは歴史が証明している。吉田茂の強いリーダーシップによって日本は救われたのだ。

年が明けると沖縄は選挙の年を迎える。無用の期待感を煽った結果、政府は自縄自縛で身動きが取れなくなるだろう。その時、鳩山政権は「県民の民意を尊重」の美名のもと、現実味のない「県外移転」を追求するのであろうか。一つの地方自治体が国全体の政策を決めるといふ本末転倒の事象が起きる。これも別な意味で将来に大きな禍根を残すことになるだろう。

そうなったとしても時間がかかるだけで普天間固定化が進むだけだ。周辺住民を引き続き危険な状態に放置することになる。もし一旦事故でも起これば、最悪「米軍撤退」となる可能性もある。その時は本当に日米同盟の終焉である。日本の安全保障政策の骨幹を揺るがすことになる。

安全保障政策を政争の具にしてはならない。連立与党の政権維持が国の安全より優先することがあってはならないのだ。英国では「政争は水際まで」の言葉がある。政権交代しても国の骨幹たる外交・安保政策はほとんど変わらない。だからこそ国民は政権交代を安んじて選択するのだ。これが成熟し

た民主主義である。

日米同盟関係の弱体化は、間違いなく日本の国力低下につながるだろう。日米同盟は政治、外交問題だけでなく経済問題など広範な側面に影響を与えている。米国との協調を図ることで国益追求してきた日本にとって痛手は甚大である。

米議会の対日感情も気になるところである。湾岸戦争の際、「小切手外交」の汚名を受けた後どうだったか。構造協議決裂、数値目標等、数々の対日制裁の動きは記憶に新しい。当時のペーカー国務長官は日本とのパートナーシップを認めないと公言し、同盟は漂流した。このままでは再び同盟は漂流する。米国と日本の離間を画策してきた北朝鮮、中国の思うつぼである。

何より日本の防衛が危機にさらされる。日本は核も攻撃力も持たない。「防衛して攻撃しないものは滅びる」とクラウゼウィッツは言った。にも拘わらず専守防衛という軍事的にみて非常識な政策が採れるのも日米同盟があるからだ。情報分野もほとんど米国頼りである。イラク派遣でも思い知らされた。貿易立国日本の生命線、シーレーンも事実上、第7艦隊が守っている。残念ではあるが日本は自分で自国を守れない。米国の軍事的存在に国家の安全を依存するしかないのが現実だ。日本は自国の弱さを自覚し、徹底してリアリズムを追求する以外に生き残る道はないのだ。

鳩山政権周辺には全共闘世代が多いせいも、ある種の屈折した反米感情が見え隠れするように思える。強い米国が許せない、米国と一緒にやりたくない、離れたい。こういった感情は政策選択に反映させてはならない。また自民党政治からの差別化を意識しすぎなのかもしれない。だがこれも誤りだ。政策には感情や主観は抜きにして、純粹に国益に照らし「賢明」か「愚昧」かの選択をしなければならない。

日米同盟が漂流してからは手遅れだ。今ならまだ修復は可能である。“Trust me.”と言って信頼を裏切るとほとんど修復は不可能になる。おそらくオバマ大統領との信頼回復は鳩山首相在任中では無理だろう。日米両国にとって極めて不幸なことである。

普天間問題の落とし所は決まっている。あとは首相が決断するだけだ。優柔不断で決断しない愚かな指揮官は敵より怖い、とは軍事の常識である。総理ともなれば国家に対する悪影響は計り知れない。「決断を下し、人に命令するのが嫌なら、初めから族長にならなければよい」とフン族の王、アッチラ王は言った。決断を下せないリーダーはリーダーになる資格は無いのだ。